

# あらき通信

2025年 12月 15日 発行

(株)アラキ工務店 編集・発行 荒木 勇

〒 615-0906 京都市右京区梅津高畝町 52-2

Tel 075-882-8668 [www.kyoto-araki.jp/](http://www.kyoto-araki.jp/)

Fax 075-872-0223 [info@kyoto-kozai.com](mailto:info@kyoto-kozai.com)



## 1年の歩みと100年の歩み

昨年10月、私はアラキ工務店に加わり、創業100周年という大きな節目を迎える記念事業を担当することとなりました。まず取り組んだのは、会社のこれまでを知ることでした。

創業当時から大切にされてきた仕事への誠実さ、人とのつながりに向けた姿勢、そして地域や京都の文化との深い関わり。これまでの歴史や想いを知るため、多くの方にお話を伺い、資料を読み、現場を歩きながら、100年という時間と向き合いました。

この学びの一つのかたちが、10月29日に開催した「100周年記念式典」です。

本記念事業は、未来志向の華やかなイベントではなく、過去のプロジェクトを振り返り、それぞれに込められた想いを再確認し、社員一人ひとりと分かち合うこと、この100年間でア



ラキ工務店に関わってくださったすべての方々への感謝を伝える会と位置づけました。

また、100周年にあわせて制作した記念動画も公開中です。現在の社員の作業風景や京町家改修を中心にまとめた映像となっており、私たちが大切にしてきた「手仕事」と「人の思い」を映し出しています。

メッセージには、「伝統建築は決して一社だけで成し得るものではない。多くの人の手と想いが重なり、その力が未来を創る原動力になる」という言葉を添えました。これは、100年の歩みを支えてくださったすべての方々への感謝の気持ちでもあります。

これからもアラキ工務店は、伝統とアラキ工務店らしさを守りながら、地域とともに歩み続けます。節目の一年を振り返りつつ、次の100年へ向けて、また一步を踏み出して参ります。



記念動画

柴田 秀俊



## 式典会場「Question」

会場は、今回初めて利用した「QUESTION」8階のレンタルスペース「DAIDOKORO」。河原町御池交差点の南東角という便利な立地にあり、明るく開放的な雰囲気印象的でしたので、ここで少しご紹介します。

最上階に位置する会場からは京都の街並みを一望でき、特にバルコニーからの眺めは最高。

広々としたキッチンを備えた宴会スペースで、かしこまりすぎないモダンな空間が、記念のひとつをいっそう和やかなものにしてくれました。

「DAIDOKORO」には、料理イベントや試食会などに利用できるレンタルスペースプランと、食事付きの宴会プランがあり、今回は後者を利用しました。

当日のメニューはどれも評判が良く、見た目にも美しいオードブル、香ばしく焼き上げた野菜、特大鍋で仕上げるブイヤベース、そして彩り豊かなスイーツなど、五感で楽しめるお料理が並びました。

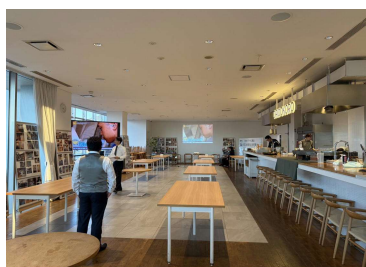
当日は多くの方にご列席いただき、立食スタイルでの賑やかなパーティーに。

普段お世話になっている方々との歓談や、久しぶりに顔を合わせた仲間との思い出話に花が咲きました。

中には、お話に夢中になってお料理をゆっくり味わう時間が足りなかったという声も。次の機会には、少人数でゆったりとお料理を楽しむ集まりとして、ぜひ再訪してみたいと思います。

記念の節目にふさわしい素敵な会場と、笑顔あふれる100周年のお祝いとなりました。

長崎 道



キッチン付きの会場



オードブル

## フットサル大会

会社の若者達でフットサルのエンジョイカップに参加してきました。

私自身、幼稚園年中～高校3年生まで学生時代はサッカーにどっぷりの人生でした。でも、社会人になってからはサッカー自体をする機会があまり無く、約3年ぶりのフットサル参戦です。



いざ始めると、大会に参加している人の殆どが、頻繁にフットサルをしている方達だと、動きで分かりました。1試合目からなかなかハードな試合でした。内心「どこがエンジョイやの」と、10回は思いました。只、試合をこなすごとにチームワークが良くなります。

得点が入ると皆で喜び、逆に得点を決められると皆で声を出し鼓舞し合う。この感覚がとても懐かしく、心地の良い空間だという事に改めて気が付きました。やはり皆で体を動かすのは最高です。先輩大工にダッシュでハイタッチを求める事なんか仕事をしているとあり得ない行動です。でも、それを可能にするのがスポーツの力だと改めて思いました。

今回はとても良い刺激になりました。それと同時に、普段から体を動かさないと駄目だなと新ためて実感しました。ゴルフの打ちっぱなしだけではなく、定期的にランニングも始めてみようと思います。

若手大工はやはり力があります。この力を仕事にも生かされるように、日々頑張ります。

島田 将也





## アヤメ張りの板塀と、外部の板戸

アヤメ張りの板塀を作成しました。今回は、外から少し見えにくく隙間45mmぐらい

板は 205mmぐらいの巾の赤身の杉板です。胴縁は少し大きめで 45角タナリス注入材（腐りにくい木）です。

塀の外から見ると、アルミ角パイプ75mm角柱を1mから1.5mピッチでたてて、足元だけダブルで立ててボルト止めしました。

強度が増し台風などで、折れない確率がアップします。

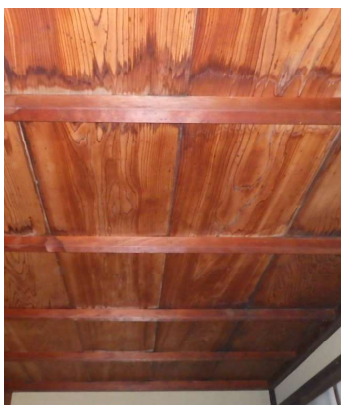
板戸も大工さんに作ってもらいました。取手は、昔からある木の横サルで、少し大きめです。板戸はどうしても重さで下がってくるので、斜めに筋交を開戸の引っ張るほうに入れました。脳天ビス止めです。建具も板は赤身の杉板で、棧は全てタナリス注入材です。

庭側から見ると、丸い取手が楽しいです。弊社大工の栗木作。基礎工事は、安田と植松も手伝いました。共同作業です。

荒木 智

## 染み抜き工事の依頼

そのお家は屋根が古く、瓦からの雨漏りで和室の天井板に沢山黒染みが付いており、洗い屋さんが灰汁(あく)洗いをし綺麗にしてもらいました。灰汁洗いとは、主に木材の汚れ(灰汁、日焼け、染み、カビ)を除去して、木材の風合いを取り戻す洗浄作業です。



灰汁洗い前

この作業は思っている以上に難しく、薬品が効き過ぎると木材が傷んでしまい、ささくれのようになるので注意が必要です。

厚みがある天然天井板だと薬品を使えるので、専門的な技術と知識があれば綺麗に仕上がるのですが、突板天井(天然木の薄いスライスを基材に貼り付けた天井)だとめくられてきて作業自体ができません。天然板か突板かを区別するには、見た目より叩いた音や板の柔らかさで判断します。この違いが微妙なんです。

天井板に限らず、木製建具や障子の灰汁洗いをしてみたいかがでしょうか。木材の風合いを取り戻すと気持ちがりセットされておすすめです。

嶋林 貴之

## 学びEXP02025に出展

9月6～7日、京都産業会館で開催されたイベントに参加しました。当日は柴田監督と僕と工藤さんの3名で、ちびっ子たちに鉋削り体験をしてもらいました。

順番待ちができるくらいに大盛況。ちびっこの両親も飛び入りで参加したりで、食事をする暇もないくらいに忙しかったです。1日目で鉋が傷んでしまい、夜遅くまで刃を研ぎ直したりして大変でしたが、大勢の方に喜んでいただいたみたいで良かったです。体験した子供たちが将来大工になってくれたらいいなと思いました。

斉藤 優介





## 景観をめぐる

先日、京都の街づくりを研究している大阪の大学院生と話す機会を得た。彼女は京都市の景観政策をテーマに研究しており、「京都らしさをどう守り、どう次世代へつなげるか」という問いに真摯に取り組んでいた。京都の美しさを未来にどう残せるのかについてしばし意見交換。

京都市の「新景観政策」は、2007年に本格的に導入された制度。市全体で建物の高さや色彩、屋外広告物などを細かく規制し、伝統的な町並みや自然の眺望を守ることを目的としている。どこからでも山並みが見えるように高さを制限するなど、全国的に比較しても最も厳格な取り組みのひとつ。彼女曰く、「京都では景観そのものが文化財」。海外の実例としては、パリ中心部の高さ制限(住宅31m、商業施設37m以下)や、ロンドンのビューコリドー政策(視界を守る為に特定方向からの眺望を遮る建築を禁止)など。

一方で、彼女は政策の副作用についても触れた。高さ制限やデザイン規制が再開発の妨げとなり、老朽化した建物がそのまま残る地域もあるという。また、指定地区内の地価高騰や、価値判断基準の対立など。美しい町並みを守ることと、そこで人が暮らし続けられることの両立の難しさが『美しいまちづくり』の根底に横たわっている。これらの諸問題は京都だけに限らず、景観政策を実施している諸外国にもまったく同様の問題が発生しているようだ。



そんな中で注目されているのが、昨年9月に始まった「Preserve Kyoto Gift」の取り組みだそう。観光客が京都市へ『寄付』を行うと、その半額分の電子ギフト券が返礼として発行され、残りの寄付金は京都の文化や景観保全に使われる。観光を「消費」ではなく「共創」へと変えるこの発想は、景観政策の新しいかたちを提示しているように思えた。旅人が一時的な訪問者ではなく、“未来の京都を支える一員”となる仕組み。しかし、寄付金の透明性や、地域住民との連携をどう確保するかが、今後の課題だそう。理想と現実の狭間でよい解決策を模索を続けている彼女の今後の活躍に期待したい。

ふと「伝統は動く」という言葉を思い出した。伝統とは、過去をそのまま冷凍保存することではないはず。時代と共に形を変えながら、その価値観を未来へつなぐ営み。京都の景観政策もまた、その静かな「動き」の中にある。変わらな

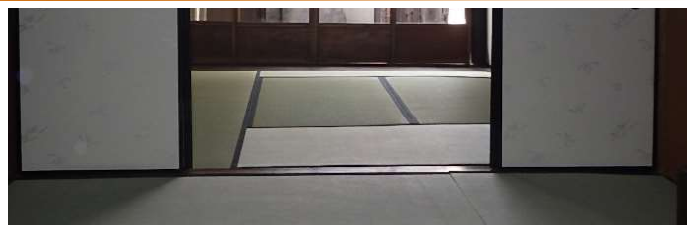
いように見える街並みの裏で、何を守り、何を変えるかを問い続け、より高い価値判断基準を求め続ける姿勢が、京都の“京都らしさ”の一つなのでと考える。

小野 敏明



AIで生成した100年後の京都

## 畳の種類



外観からは全く見えないのが畳床です。中身は稲藁で作られた藁床と、藁とポリスチレンフォームを組み合わせた藁サンド床(藁サンドイッチ床)、藁を使わずインシュレーションボードとポリスチレンフォームを組み合わせた建材床、ポリスチレンフォームだけの化学床などがあります。

グレードは藁床が一番高く、化学床が安いです。新築マンションは大抵後者です。それぞれ長短所があり、藁床は自然素材で調湿効果がありますが、建材床や化学床は防虫効果や断熱性能が高いです。藁サンド床は高価ですが、裸足で歩いた時の気持ちよさ(クッション性)、寿命の長さ、断熱効果等がありとてもお勧めです。

一方、普段目に触れるのが畳表。中国産か日本産か、麻糸か綿糸かなどで、退色具合や耐久性が変わります。



藁サンド床

畳交換の時は、ぜひとも藁サンド床の日本産畳おもてをご検討下さい。

健康で快適な空間づくりに、新しい畳の天然蘭草の香りと肌触りは最高です。

嶋林 貴之

## 住まいについていろいろな話 第37回 「格子部分の造り替え」

京町家といえば意匠ですぐ、中2階で虫籠窓、中は通り抜け土間で吹き抜けで台所、がステレオタイプのイメージです。今回は外部の格子を造り変えました。。

もともとは、昭和初期型で、出格子の腰部分が壁になり、御影石やセメントで成型しており、上部にはガラス窓の引違いと欄間ガラス戸が入っていることが多いです。ガラス戸の外には、真鍮製のパイプが格子状に取り付けてある場合も多いです。



工事前:昭和初期型の外観



工事後:伝統的な出格子の外観

今回は出ている部分を全て取り払い、よくある出格子にしました。だいぶ感じが変わりました。玄関の格子戸もかなり劣化していたので新規に交換しています。

ポストとインターフォンは、町家の雰囲気にはそぐわないのですが、不便だということで取り付けました。

### 【格子についてのいろいろ】

格子は、取り付ける場所により、出格子と平格子に大別されます。また格子の種類(幅や格子の間隔など)により呼び名が変わります。



酒屋格子



糸屋格子



織屋格子

- ・呉服屋格子 親子格子型 親が1本に子が2本
- ・糸屋格子 親子格子型 親が1本に子が3本
- ・織屋格子 親子格子型 親が1本に子が4本
- ・仕舞屋格子 引退し隠居された人が住む居室の格子

- ・炭屋格子 炭の粉が外に飛ばないように細い隙間の格子
- ・米屋格子 かなり太い格子 格子は生地のまま
- ・酒屋格子 米屋格子とほぼ同じ 格子はベニガラ塗

などです。

米屋以外の格子には、通常ベニガラが塗られています。紅柄、弁柄とも言います。

酸化鉄が主成分の赤色(朱色)で、これに松煙墨(黒)を混ぜて調色します。水溶性で水に溶かします。私もよく作りました。手を真っ黒にしながら思っている色を出すのに、何回も何回も墨を入れて攪拌したものです。ベニガラ塗りはこれを木材に塗って摺り込むようにこすりつけ、乾いた後に油引きを行い水分をはじくように仕上げます。現在はこの伝統的な施工方法のほかに、主成分はベニガラですが天然樹脂が入っている既製品もあり、もう少し簡易に塗れる場合もあります。 村上 幸男

### KYOTO WOOD EXHIBITION 2025

10月5～6日、二条城で開催されました。

当社からは4名参加。鉋削り体験や、会長の模型による京町家の木組の説明、当社の仕事の紹介などをしましたが、ほぼ全て海外からの観光客の方々(@\_@)。

「kanna try! good job」などと、片言の英語で乗り切りました。

柴田秀俊





## 古民家改修工事(竣工しました！)

前々回からあらかし通信でご紹介していた古民家改修工事が遂に完成しました。工事は解体から始まり、井戸工事、構造補強を経ておよそ1年に渡る工期となりました。平屋建てということから、2階建の建物に比べて基礎廻りや小屋組みの修理に時間と手間が掛かる工事となりました。

内部は真壁仕様(柱を化粧で見せる仕上)を基本とし、バランスよく木材と土壁を設えました。特にダイニングキッチン廻りはお客が一番長く過ごされるお部屋ですので、建物の中でも特に仕様や納まりにこだわりを持って施工させて頂きました。

特に頭を悩ませたのは、“キッチンを使用しない時には見えないよう隠して欲しい”というご要望です。伝統工法の建物を改修する場合、柱の位置や間取りはある程度決まっているため、極端な間取り変更や柱移動は建物に負担が掛ってしまいます。その可能な条件内でキッチンを設置し、なおかつ目隠しをしなければなりません。そしてもう一つ自分の中のルールとして持っている、“デザインを損ねない”という条件も満たさなければなりません。

解決策として、キッチンの前へ引込戸を設置することに。毎日の動作となることから簡単に開閉でき、デザイン、構造に支障なく、更にはエアコンの埋込、レンジフードの設置などにも配慮した上でこのスッキリ感です(自画自賛です笑!)

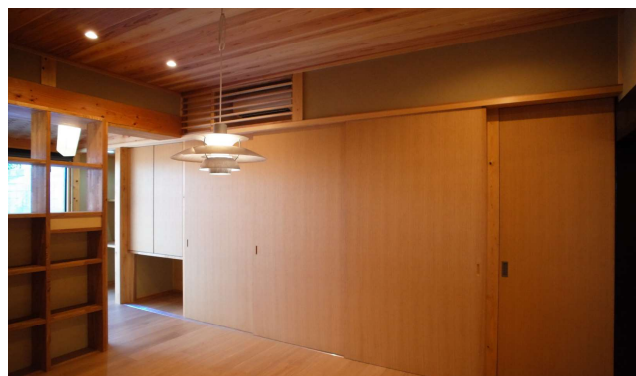
建具を開けるとこんな感じです。キッチンスペースは他室とは異なる大壁仕様(柱を隠す仕上)とし、機能的かつデザインはスタイリッシュにというイメージで計画させて頂きました。建物の中にはいくつかの“見せ場”があるのですが、こちらは中でもかなり見応えのある空間に仕上げられたと思います。

この建物の完成を待って、表のスペースで『コヨミ舎』という雑貨屋さんが再開されました。是非お店にも立ち寄ってください。ネット販売もされていてとても可愛いグッズが揃っています。

『コヨミ舎』 京都市左京区北白川仕伏町33番地 <https://koyomisha.stores.jp/> 米沢 和也



引込戸を全開した状態



引込戸を閉めた状態

## ものづくりフェスタ

11月8日、伏見パルスプラザで開催され、日頃ゲームばかりしている小6の孫を連れて行って来ました。建設関連、お菓子、料理、等いろんな団体が参加されており、体験型のイベントが数多くありました。孫はフォークリフトのラジコンカーの操縦、木工教室、左官の土塗り体験等いつもの日曜日と違って楽しかったようです。



最近大工がすごく減っていて、2000年では全国で64万人いたのに2020年には29万人。更に2035年には50%減少すると推測されています。大工に限らずものづくりの楽しさを子供達にたくさん体験してほしいと思いました。

足達 宗凡

## 編集後記

11月4日に大阪経済大学で臨時講師しました。来年もいろんなことにチャレンジしたいです。

ではまた。

皆さん良いお年を～

荒木 勇

